IOJだより　第６７号　2013年4月11日発行

NPO法人-IOJ
日本の将来を考える会
http://ioj-japan.com/xoops/

ウィトゲンシュタインの哲学に学ぶ“無限問題”の解釈
－原子力の絶対安全とは －

１．はじめに

ここ数カ月間、ウィトゲンシュタイン哲学の枠組みを“規制哲学”の構築に利用できないかと思い、主として野矢茂樹氏による解説書『ウィトゲンシュタイン「論理哲学論考」を読む』（筑摩書房、2012年）などと格闘した。原著の「論理哲学論考」（岩波文庫）は対応箇所を確認しただけ。原書だけでは理解に数年は要するかも知れない、と思われたからである。

そこには目から鱗が落ちるような“世界観”があった。その一つは“無限大”をどう考えるかである。もう一つは、現世界の構成と新しい世界の創造に必要な“対象”の特性をどう極めるかその方策である。後者は規制の在り方や安全基準の検証に直結する手段として将来有益になろう。ここでは前者について検討したい。

原子力には“絶対（安全）”という考えが何時も付きまとう。理由は、原子力が人知を超えた宇宙の根源であると同時に「無限という極限」が事故の評価に関連するからである。絶対と無限と極限は同根。

現在の原子力の混迷は“絶対”に対するマスコミの誤解報道に起因している事実を否定できない。ここではウィトゲンシュタインの「論理哲学論考」を参考にしながらどこに誤解があるか分析してみる。

実は、無限大あるいは極限は我々にとって次のように身近である。

１)無限大という“数”を見た人は存在しないが、それなしでは四則演算は成り立たないという二律背反。
２)最良の人生を送った人も存在しないが、その目標なしでは人々は生きていけないという矛盾。
３)宇宙空間が有限であれば、距離という概念が成立しないという不思議。
４)事故ゼロの世界が存在しないことは、ウィトゲンシュタインの“論理空間”の構成の仕方から明白。
５)人一人の命は地球より重い、という極限は比喩的には意味をなすが、文字通りの意味は地球の存在を否定するという二律背反。
６)原発事故は日本の将来より重い、に繋がる反原発新聞の情緒的主張は日本の存在の否定に繋がるという二律背反、

などである。これらは“無限問題”である。それに関する議論は、絶対安全や故障ゼロの要求を引き出すが、捉え方が正しくないと“情緒的”な見方が支配的になり、風評被害や原発アレルギーを生じる。反原発を唱える反日マスコミが読者を虜にする論拠は「情緒を表に絶対を裏」にしたコインにある。

これらの無限問題は“無限”をどう捉えたらよいか、それとどう付合ったらよいか、という哲学問題である。ウィトゲンシュタインは「論理哲学論考」でこの問題を“以下同様”という無限操作で処理できることを示している。この考え方を応用して、どのように原子力問題の偏見を矯正できるか、検討する価値は大きい。

２．“以下同様”という概念－無限操作

今、ゼロを出発点としそれに１を足す操作を繰り返す。すると2が得られ、3が得られる。これをどこまでも繰り返す。一兆の一兆倍まで進んでも同じ操作を繰り返す。気が遠くなる操作である。このようにすればいつか無限大に到達できる、と考える。これは一体何を意味するか。「実は、無限大は“以下同様”という操作そのものであり、∞という実体として捉えない」ということ。言い換えれば、この無限操作によって達する数を無限大とするので、無限大という“ある実体”が“無限操作”に置換されるのである。無限大という実体はこの世のものでないが操作はこの世のものである。

この無限操作を“以下同様”という言葉で置き換える。この時、無限とは何かという我々の長年の矛盾が氷解する。宇宙のかなたの無限が現実社会に引き戻されるのである。

まず、無限数は見ることが出来ないからそれは存在しないと結論づければ、四則演算や数学そのものが成立しなくなる。数学の背後には目に見えない無限数が存在しなければならない。変な表現だが、我々が住む世界にも“以下同様”で表現される“無限”が存在しないとすると矛盾が生じる。この考え方を“事故ゼロ”に適用すれば、事故ゼロを目指した継続的“努力”という無限操作が“事故ゼロの世界”に置き換わるのである。保全やQMSにおける“PDCA”はこれに相当する。こういう見方は将来を見据えた余裕のある原子力観を我々に示してくれる。

放射能汚染レベルゼロという要求がすぐに達成されないから反原発に傾くという行為は、性急に過ぎる。無限とは何かを正しく理解すれば現在日本人から失われた「科学的判断」を取り戻せる。除染と云う操作を繰り返せば日常生活に支障のないレベルは達成できる。「科学的判断」の重要性に気がつけば、ゼロ問題に現実的側面を導入でき、ICRPなどの基準を無視することの愚かさに気づく。科学を拒否し、情緒の問題にすりかえれば、無限問題の虜のままである。風評被害の根源はこの誤った認識にある。

4月9日に、NHKが福島第一原発での汚染水漏れが深刻と報道していた。この種の報道は「問題の解決が望まれる」と云いながら風評被害をわざわざ拡大していることに気が付かねばならない。こうなるとマスコミの罪は大きい。漁民が風評被害を恐れなければ、基準値以下の除染された水を海に放出でき、問題は一挙に解決する。あのような報道は、風評被害を拡大させるだけでなく、復興を妨げておりその罪は軽くない。風評被害と無限問題を踏まえた誠実な報道をして欲しいものである。

３．位置と速度に基づいた無限概念の解釈

放射能ゼロや事故ゼロ問題は、プロセス的見方を採用して、即時解決ではなく時間をかけて現実的に解決されるべきもの。

そうしないで、事故の悲惨さだけを絶対的に把握して、だから原発はやめようと即断するのは愚策である。この無限大の“以下同様”という概念は、時間の役割を重要と考えるから、事故を瞬間的に悲惨としながらも、他の歴史的な事例と比較するなどの相対化を要請する。

このように人間は無限性を背後に持つ世界に住んでいるが、それを有限なこの現実に持ち込む時には注意を要する。絶対安全が実現していないからと言ってそれを非難する人は例えばソクラテスの“無知の知”の意味を思うべき。ソクラテスは無限を前に人知の非力を認識し、有限の世界で最善の生き方は何かを説いた。そこでは、絶対安全は無限操作というプロセスに置き換えられる。それでも、福島事故を見た人は原発を否定する。当然であるが、“以下同様”の人生は無限に続くので、事故の悲惨さは自然に相対化される。そうでなければ、人は生きていけず、はるかに大きい別の危機に襲われる。歴史とはそういうもので“以下同様”的側面を無視する愚は避けたい。世界の本質に無頓着で、短絡的判断をすればはやがて破綻する運命に遭遇する。これがウィトゲンシュタインの思索の結論である。

ここで重要な認識に気付く。努力するとき、いったい我々は今どこにいるのか（放射能でいえば現在の空間線量率、原子炉でいえば現在の安全レベルなど）、どこに向かっているのか（努力の方向）、が重要な関心事となる。ニュートン力学の物体の“位置”と“速度”に相当する。この二つの物理量が判れば状態は決まる。原子力安全の場合、この原発の安全レベルという位置問題とそれを継続的にどのように改善するかの速度問題として理解できる。これは安全に関する我々の常識に合致する。位置問題、速度問題は“以下同様”観の要である。

４．“以下同様”観に従った見方

数の無限大が存在しなければ数学が存在し得ないという状況は、絶対安全が存在しなければどんな不具合が生じるか、という問題を生む。

人間が間違いを起こさない世界はアダムとイブの世界である。事故や不具合が存在しない世界を人間は想像できない。“以下同様”的な見方をすれば、無限数を見ることができないように絶対安全も見ることはできず、無限数が存在しないと数学が成り立たないように、絶対安全と云う概念がなければ安全性を高度化する作業目標が消えてしまう。安全確保の手段が消失することになり、一事が万事で、引いては、人類が文明を失うことにも通じる。このような概念は産業の存在理由を基盤的に支える哲学である。従って、絶対安全は“以下同様”（速度）という努力と現在の安全性レベル（位置）の指標で表現される安全概念となる。安全神話はこのように主張されなければならなかったのである。これを現実に置き換えれば、現場における保全のPDCAサイクル（速度に対応）と安全評価（位置）と云うことになる。

５．問題の神聖化は問題解決を妨げる

無限問題は神聖化に繋がりやすい。神聖化とは、重要な問題や重大な考え方に対し、その本質を情緒的に捉え、神棚に祭り上げ、思考が及ばないようにし、盲目的な判断基準にしようとする行為である。その結果“思考停止”を招き、禁句を生み、批判が困難となる。この神聖化には悪意のこもった神聖化と善良な神聖化がある。

戦後７０年も続きながら目立った成果を上げることができなかった“原水禁運動”は典型的な「善意の神聖化」である。人一人の命は地球より重い、と云った情緒的な価値判断に似ている。核廃絶は、絶対安全に似た解決困難な無限問題である。この運動を推進してきた旧社会党や共産党は「無限問題の解決はプロセス的アプローチに基づかないと“幻想”に堕してしまうことを理解できなかった」ため、北朝鮮やイランなどの核開発などに対し手も足も出せなかった。原水禁運動は神聖化の虜になっているため、何の展望も見込めず、儀式と化している。原水禁反対や原発賛成は左翼勢力が作った禁句である。「原子力ムラ人排除」という邪悪な報道と同根である。一般市民の危機感は反日的なマスコミに神経麻痺剤を注射され続けているおかげで麻痺したままであり、北朝鮮の核恐喝にも鈍感でいられる。しかし、麻痺剤注射の効果で神聖化は長く続くが、65年も経てば国民はそのまやかしに気づく。その結果が民主党の目を覆う衰退、支持率ゼロに近い福島社民党ではないか。知の欠如が信の肥大化を生むような運動を続けていれば、こうなるのは当然である。先の総選挙で、反原発新聞に乗せられその公約で戦った政党はことごとく敗退した。問題のプロセス的解法の必要性を感じ始めている国民が原発問題の神聖化に頼った戦略にまやかしを感じ取ったからに他ならない。

６．おわりにー規制哲学の必要性

繰り返すが、神聖化は問題解決を妨げる。プロセス的アプローチが適用されないとこうなる。解決できない問題は、解決できる問題に分解し、その和として現実的な解とする、という行為は日常誰もが行っているが、その行為はウィトゲンシュタインの“以下同様”観に合致する。誰も達成したことがない最良の人生を送るため、一生をかけて達成しようとする人々は「この達成困難な無限目標を解決できる有限問題に分解して解決しようとしている」。この事実は“以下同様”思想の有効性を物語っている。

規制当局が事業者の保全行為を検査するとき、事業者の行為をこの視点から検査することは本質を突いている。安全確保の本質的検査に繋がる。時代はこのような考え方が規制業務に適用される時期になっており、規制に関する哲学を構築することが要請されている。これは誤字検査と揶揄された規制から早く脱却するためにも欠かせない。

（宮 健三 記）